

水標鳥芥を鳴けり秋暑く
刈藻干せば小き花咲く残暑哉
玉に佛彫る心願や秋暑し
畫架を置く河原の繪師や秋暑し
梁組む日残暑の土の息れけり
秋暑し村次々に押す病
石を何とほさむ蟹あり秋暑し

全
春
草
全
布
水
白
人
瘦
脚
水
郷

海月湧く秋暑し雲も黄に錆びて
蘆の花
浮鳥と言ふに疑念や芦の花
移民小屋取あへず葺くに芦花さにも
月あるに異な雨や蘆の穂も鳴りて
傍係の兒の葬ひや芦の花
塔費エ村の負擔や芦の花
御下向の沿路の公事や芦の花
高沙に洗はるゝ薪や芦の花

全
春
草
全
八
葉
葵
全
瘦
脚
全
文
者
水
郷

閨秀の筆勢を聲も穂に咲いて

水郷

夏秋雜吟

八葉葵

國を分つ川涸れ涸れて雲の峯
夏山に靄はれて女瀧男瀧哉
銀鱗の水車に光る青田かな
銀河澄む肩摺れ松も江に沿ひて
海樓に酒氣滿てば銀河動きけり
湖邊の松湖邊の城や天の川
戰機見る秘事も銀河を飛ぶ星に
日温みを鳥音も霧のまばら木に
研ぎすますもの乃しこぼれを冷かな
秋の聲背戸くむ潮の桶底に
鳥宮司訪はんに鹿の連れ寄りて
汐近う拗ね木もかほご鹿群れて
鳥井茶屋とて鹿に圍子の串數も
濱住みを井も塩はゆし蕎麥の花
去りし人に夜を長う雨の降り繼いで

江村

祝二十週年記念祭

昇らんにはや階二十秋晴れて

水

郷

芙蓉茶屋双棲餅も紅白に
草に貫けば見まさる葺や鳥渡る
二人釣れば知らず競ふや鳥渡る
石上に折れし玉釵や天の川
野分すや觸穢怖るゝ淨め火も
野分すや村疊裡ひそと謀る事
霧に逃れし黒船を砦合圖かな
峯霧にためらひつ草の甘き噛む
塔ほごり霧來ぬ何時か漕ぐひまに
登るまじき霧を傳へぬ下山衆が
漬けし物見に此舟や鯛に
鯛や墓所島に舟來ぬ日なき
雨を帶ぶ成樓見つ花野馳る夕
小牛にも乳放れ護符や花野寺
楯に乗つて又過ぐ花野月明に
飾鹿追ふ騎馬も花野神事かな
楯に映る物何銀河澄むなべに
女性なき管絃も花野御陣かな

文苑

遺孤の事こましごそぶる寒き筆
沼に名の残る苛政や花芒
未了の棋目に描く布置や秋の蚊帳
秋蚊帳に櫛踏むや斯る聞怨を
阿蘇展望
霧の晴間を花野にや所々班濃なる
留別
芙蓉咲かば其前挿も思出ん

土牢に見ず行きかゝる花野哉
人追ふて盃盤裡出づ夕立てり
巖地行く馬得し暑さ紅埃裡
小作連れが山茶花日和ぎやと來て
夜蹴る色網を手に解く疲れ
又愁へず篋なづかし秋風に
巻を置きて適評を知らず柿むきぬ
猿が窟人畜ひ住む茂り哉
足萎いの踏む淨境や花野風
蔭に女性あり延びくの事枯柳

一碧樓
井泉水
櫻塊子
八重櫻
六花
珞々
鹿語
鵜平
花溪樓
碧梧桐

百三